
龍・激・王！

エンペラーディケイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍・激・王！

【Nコード】

N2342E

【作者名】

エンペラーディケイド

【あらすじ】

物語の最初は主人公勇騎の奴隷時代から始まる。なぜ主人公は奴隷になってしまったのか？勇騎はこの世界になくてはならない存在だというそしてこれから勇騎はどのような人生を送ることになるのか！恋愛あり！戦闘あり！本格的戦闘RPG今ここに参上！

プロローグ…勇騎！参上！

大海原の真ん中に立つ一つの島、その島には大きな山がたっていた。その山のなか宮殿のような建物の中、人々は魔物に奴隷として働らかされていた。

「ちゃんと働け！」ムチを持った魔物が一人の老人を叩いた。「勘弁してくださいこれ以上は無理です」魔物は

「うるせえ！奴隷のくせに生意気なんだよ。」ムチでまた老人を叩こうとした。その時、「待てよ、老人をひっぱたくもんじゃねえぜ」一人の若者が言った。魔物は

「なんだてめえは、俺に逆らうのか？」

「やめておけ逆らえば殺されるぞ」回りの人々は言った。

「うるせえ！てめえに好き勝手やらせるかよ」若者は言った。

「てめえ、ひっぱたいてやる」魔物はムチを振り回し攻撃してきた。しかし、若者はムチを素手でつかみ魔物を投げ飛ばした。若者は同時に魔物に殴りかかった。

「このやろう！」

魔物を殴り飛ばした。魔物は遠くへとばされ壁に思い切りぶつかった。「何者だきさま？」若者は

「俺か？俺は宇宙一強くなる男　勇騎だ！」

この勇騎こそこれからの世界に必要な救世主になる男だった。

「大丈夫か？」

勇騎は言った。

「ありがとうございますでもあなたの立場が…」老人は言った
「大丈夫だよ。あんな奴らが何体来ようと敵じゃねえ！」

神殿の奥に向かっていった魔物がいた

「ジユラ様！」「どうした？なにかあったか？」そのジユラとよばれた魔物が答えた。身長は二メートル以上あり黒いオーブをまとう

ていた。

「さっき奴隷の人間にコテンパンにやられましたあの強さは異常です。このままではここの兵隊が全滅する恐れがあります」

ジユラは言った。

「その者は名はなんという？」

魔物は言った

「勇騎と言っていました。」

「勇騎？」ジユラは少し考えこでから言った。

「今度妙なまねしたら容赦するな」

「ははっ」

ここは奴隷たちが寝泊まりする個室オリの中にベット2つがあるだけだった。その個室に二人ずつの部屋がある。個室はなん部屋があり、勇騎と老人は一緒の部屋だった。

老人は言った。

「なぜあんなに強いのに捕まって奴隷にされてしまったんじゃ？」

勇騎は言った。

「それはいろいろあってな…」

老人は

「そうか話したくなければ話さなくてよいぞ」勇騎は

「いや、長い話になるが聞いてくれないか？俺のこれからのためにも」

勇騎は話したすのだった…

プロローグ…勇騎！参上！（後書き）

次回、勇騎の過去が明らかに！こっご期待！

第1話 俺の過去（前書き）

ついに勇騎の過去が明らかに…

第1話 俺の過去

勇騎は語り始めた。「今から約8年前、俺は三才のころから父の龍騎と親子で旅をしていた」

「勇騎、大丈夫か？もうすぐだぞ」父の龍騎が言った。

「大丈夫だよ。父ちゃん。」見渡す限りの大地、

俺達は父の友達のイグリ城の王様イグリから頼み事があると、城に呼ばれたのだった。

「父ちゃんはすごいな。王様が友達なんだもん。」父ちゃんはいろんな人から尊敬されていた。王様や大臣などにも知り合いがたくさんいる。それに力もすごく強いよく俺に、

「俺は百匹のモンスターをひとふりで倒せるんだぜ」
とよく自慢してきた。

どの位歩いたかやつとイグリ城の前についた回りは川に囲まれ、橋がかかっていた。その橋を渡ると、大きな門があった。龍騎は門の前に立っている兵士に言った。

「イグリ王の友、龍騎です。王のお呼びにより参上つかまつりました。」兵士は

「龍騎様ですか？お待ちしております。」兵士は門を開けた。

「ささつ中へどうぞ」中へ入ると大きな大広間があった。俺たちは赤いじゅうたんの上をまっすぐに歩き、上に行く階段を上がり、二階へ上がった。二階には図書館らしきものがあり、左には食堂のような部屋があった。隣にあった。階段を上がり、三階に上がった。階段を上がった後は 前に扉があった。

「さあ、中へお入りください。王がお待ちです。」兵士は言って扉を開けた。そこには王室があり、立派な椅子に王様が座っていた。小さい頃の俺は始めて王室に入ったので緊張していた。

王様は立ち上がり、

「おお、龍騎！久しぶりだな、まあ立ち話もなんだ。そこへ座れ」

すぐ近くに椅子と机があった。3人はそこへ行き座った。

龍騎は

「イグリ久しぶりだな、何年ぶりだろうか」

イグリ王は

「おお、そこにいるのはそなたの息子か？」

勇騎は

「勇騎です。よろしくお願いします。」と言った。

イグリ王は言った。

「こういう城は初めてだろう私達が話してる間城を探検していたらどうだ？」

勇騎は

「いいんですか？ありがとうございます。」勇騎は階段を走って降りていった。

勇騎は二階へ降りた。二階には図書館が右に 左には食堂と別れていた。勇騎はまず図書館に入った。

本棚がたくさん回りにあり天井に届くくらいの高さだ。あまりの本の多さに勇騎は驚いた。

「おお、小さい子が図書館に来るとは珍しい。歴史に興味があるのかな？」真ん中の椅子に座っていた老人が話しかけてきた。

勇騎は

「すつごいなここ。なんの本があるんですか？」「右にはこの城の歴史の本、左には世界の…」老人の説明は10分位続いた。

「ありがとうございます」

勇騎は出てきた。

「はあ。疲れた。説明なげーな」

次は一階に降りた。

一階にはいろんな部屋があった。大臣の部屋、兵士長の部屋、などいろんな部屋があった。

勇騎は歩いてると、一人の同じ年位の子どもが勇騎に向かって

「お前見たことぬない奴だな、よし。お前を手下にしてやろう」

勇騎は

「はあ、なんでオメーの手下になんきやならねえんだ」
その子は

「なんだその言葉は王子に向かってなんだ？無礼だぞ」

勇騎は

「るせゝてめえこそなんなんだよ。」

二人がにらみ合ってる時に。龍騎がきた。

「おお、勇騎ここにいたか　おや？その子は友達か？」

勇騎は

「こいつなんかいきなり手下にしてやるとか言ってきたんだよ。わけわかんないよ」

龍騎は

「その子は王子様だよ勇騎、ジーク王子だよ」

勇騎は

「王子？こいつが？」

ジークは

「そうだ。ははは今から俺が隠れるから見つけてみる。見つけたらお前を家臣にしてやる。だめだったら手下な」そういつてどこかへ走っていった。

「どっちもかわんねえだろー！」

勇騎はいった。

龍騎は

「勇騎聞いてくれイグリに頼まれたんだがあの王子の友達になってくれないか？あの子ああいう性格だから友達ができないんだって。本当はみんなと遊びたいのに…」

勇騎は

「へっ！おもしれえ。取っ捕まえてやる！」勇騎は走っていった。

龍騎は

「俺の話聞いてた…？」勇騎は走っていくと一つの部屋を見つけた。その扉には

「王子の部屋」と書かれていた。

「ここだ。」勇騎は扉を開けた。しかし、ベットと机があるだけで人影は見当たらなかった。勇騎は机の下にスイッチがあるのを見つけた。押してみたすると階段がでてきた。

「よしっ」中へ入った。下に続いていた。階段を降り、地下道のようなところにでた。まっすぐ行くと光が見えた。進むと外にでた。ここは城の川の前だった。

「よく見つけたな」声がして振り返るとジークが立っていた。

「じゃ約束通り家臣に……」

「待て」勇騎は言った。

「友達じゃだめか？」

ジークは

「友達？」ときいた。

「ああ、友達だ。」

「なぜお前と友達にならなければならん。

「俺は王子だぞ。身分が違うんだ」

ジークは言った。

「うるせえ！身分なんてどうでもいいんだよ。お前友達が欲しいんだらなら俺がなってやるよ。お前と俺は友達だ！」

ジークは

「友達？」と言った。

「寂しかった今までそんなことを言われたのは初めてだ。すまん。ずいぶんひどいことを言ってしまった。」

勇騎は

「わかりやいいんだよ……」

と言った。

「いまだ！」

突然後ろから大人が二人襲いかかってきた。

「なんだてめえらは？」勇騎は殴りかかろうとした。

「動くな！ガキ！王子がどうなってもいいのか？」

大人二人は急いでいかだにのり、逃げていった。

「待ちやがれ！」勇騎は追いかけようとした。が、いかだは遠くへ行ってしまうた。そうだ父ちゃんに知らせなきゃ。

勇騎は王の間へ行きイグリと龍騎に知らせた。

「なに！わかったすぐに探させよう。」イグリは家臣にジークを探そう言った。

龍騎は

「よく知らせてくれたな。あとは俺に任せろ！」

勇騎は

「俺も行く！ジークを助けるんだ。」

龍騎は

「お前を危険な目に会わせるわけにはいかん。待つてくれ必ずもどってくる。」そう言つて龍騎は探しに言った。ここでじつとしてる訳にはいかない。俺も行くぜ。

勇騎は城を出た。しばらく歩くといかだが置いてきぼりにたつていた。

「これだ！」勇騎は近くにあつた足跡をたどつて行つた。その先には不気味な遺跡があつた。やつらはここにジークをつれさつたのか。ここでじつとしてる訳にはいかない。俺も行くぜ。

勇騎は城を出た。しばらく歩くといかだが置いてきぼりにたつていた。

「これだ！」勇騎は近くにあつた足跡をたどつて行つた。その先には不気味な遺跡があつた。やつらはここにジークをつれさつたのか。行くぜ！勇騎は中へ入つた。中薄暗く気味が悪い。ちよつと進むと部屋があつた。その部屋から声がした

「ガキ一人捕まえるのなんて楽勝だぜ」

「兄貴これで儲かりましたかたねあのお方のおかげで稼いでこれましたね」

さっきの二人組だ！勇騎は気づかれないように牢屋に向かった。もう少し…

ガチャン！音をたててしまった下にある酒をけってしまった。

「誰だ！？」「二人組が襲いかかってきた

「ん？さっきのガキじゃねえか。こいつも奴隷にしてやる」

「へっ！やれるものならやってみな！」 勇騎は二人を飛び越え

「炎の拳！」と言って手に炎が包まれ二人を殴った。

「あちちっ助けてくれ」二人が叫ぶと周りから魔物が現れた。がいこつの騎手がたくさん現れた。 「へっ！かかってこいや！炎の拳！」何匹倒したかだが何匹もいるのできりが無い。

「やべえ」壁に追い込まれた。

その時！目にも止まらぬ速さで走り抜き 勇騎の前で止まった者がいた。その者が刀を鞘に納めるとがいこつ達が一瞬で倒れた。

「大丈夫か？勇騎」龍騎だった。 「父ちゃん！」 勇騎はよろこんだ。

「速く王子を助けてでるぞ！」牢屋へ行きジークの前にきた 「勇騎！」ジークは叫んだ。 龍騎が鍵を開けた。

「さあ速くいかだに！」 龍騎は言った。その時、がいこつがこっちにやって来た。 龍騎は

「速く行け！ここは俺が食い止める！大丈夫さ俺は不死身だ！」そう行つて。魔物達に斬りかかって行つた。

「父ちゃんなら大丈夫だ行こうぜ」

二人は急いだ。いかだを降り、出口にでようとしたその時！ 「はっはっは」逃げられると思つたか？この鬼ごっこ私の勝ちだね。」声と同時に前に急にでかい魔物が現れた。そいつは黒いローブを着ていた

「私の名はジュラさあ。行こう。私の世界へ…」

勇騎は

「炎の拳！」 殴りかかった。しかしジュラにはびくともしない。

「なにっ！」ジュラは

「面白い技を持っているねならばこれならどうだ！」ジュラの目が光った。急に勇騎の体が動かなくなつた。ヤバイ…

「待てっ！」龍騎がやってきた

「ジユラ！貴様を倒す！」龍騎は斬りかかった。ジユラは大きい火の玉を投げた、しかし 龍騎は一振りで火の玉を斬り裂いた
「なかなかやるな これならどうか」勇騎を人質にとった。「父ちゃん俺なんかよりこいつを」

龍騎は笑った。剣をすて座った。ジユラは火の玉を連発した 龍騎がダメージをくらいついに倒れた。「父ちゃん！」

龍騎は「いいか勇騎よく聞け…母さんは生きている 母さんは魔物に捕まっている母さんを助け出し、魔物を倒し。この世界を救ってくれ…」 勇騎は涙いっぱいになった。ジユラが火の玉をでかくした。

「遺言は終わりましたか？ではさらば。」

ジユラは龍騎になげつけた

「父ちゃん…！」

そして俺は気を失い ジークと共に奴隷なされた…

第1話 俺の過去（後書き）

次回ついに奴隷時代 完結？

第2話脱出そして出会い…（前書き）

最近いぞがしくて更新が遅れてすみません。それと第1話なんですがミスがあつたようです。すみません。まだ未熟者ですがよろしく願ひいたします

第2話脱出そして出会い…

勇騎は全てを語り終わった。

「そんな事があったのか、つらかったの？」

じいさんは言った。「お主はここにいてはいかん。ここから脱出するんだ」

「でもどうやって…」

勇騎は言った。するとトビラが開き、

「おい。時間だ働け」

魔物が来て言った。

「ちっわかったよ」

勇騎は言った。その時魔物の後ろから一人、魔物に殴りかかってきた。

「何！」

魔物は振り向くと同時に殴られ気絶した。

「久しぶりだな勇騎！」

その若者が言った。若者は奴隷の破れかけていた服を着ていた。

「ジーク！」勇騎は言った。そう。この若者こそあの勇騎と一緒に捕まった王子ジークであった。

「俺が今まで何をしていたと思う？」

ジークは言った。

勇騎は

「何をしてたんだよ全然働いてなかったじゃねえか」「ふっふっ

ふ働いてたさここから脱出する抜け道をな」

ジークは言った。

「まじかよ。すげえな」勇騎は言った。「さすがだなやっぱ俺の

友達だぜ！」

ジークは

「まあ待て夜の見張りは薄い。だから今夜抜けだそう」

勇騎は

「よっしゃ。やっと抜けられるぜ」

じいさんは

「よかったのお頼むぞ二人ともこの世界を救ってくれ」

勇騎は

「じいさんは行かないのか？」

「わしは足手まといになるだけじゃわしのせいで逃げられなくなつたらどうする？世界を救う方が大切だろ？」

「でも…」

勇騎は言った。

「わかった置いていこう」

ジークは言った。

「なんでだよ！じいさんも連れて行こうぜ」

勇騎は叫んだ。

「お前はじいさんの気持ちがわかんねえのかよ俺らは確実に逃げて世界を救うんだ。」

勇騎は

「わかった。ぜってえじいさんも世界も救ってやる待つてろよ！ジークをぶつとばして来てやるからな！」

「頼んだぞ…」じいさんは言った

その夜、勇騎はジークの部屋に忍びこんだ。ジークはベッドをどかした。するとその下に洞窟が続いていた。

「行くぞ！」二人は中へ入って行った。中はうす暗くしばらく歩くと上から海の波の音が聞こえた。

「そうか、ここは海の下か…」

勇騎は言った。

「いたぞ！追え！」後ろから声がした。なんと魔物が5、6人追いかけてくる。ムチ男や犬のような魔物ケルベロスがいる。

「しまった、入り口ふさぐの忘れてた」ジークは叫んだ。

「へっ！問題ねえ！ぶつとばしてやる！」

勇騎は突っ込んでいった

「炎の拳！」

勇騎の手が炎につつまれ魔物に殴りかかった。

「ふん！」

急に魔術士らしきローブをまとった魔物がでてきた。

「フリーズ」いきなり呪文を唱え手から冷気がでてきた。

「うわっ」勇騎の足が凍ってしまった。「足が動かねえ」

「ミスド！」ジークが呪文を唱えた。

勇騎の足の氷が消えた。

「この呪文はあらゆる呪文の効果を消すんだ。すげえだろ」ジークは言った。

「サンキュージークやるじゃねえか」

勇騎は再びかけぬけた。

「いくぜ！俺の新技！」

勇騎の両手に炎がたまっていた。

「ボオルカニツクバースト！」

手にためた炎が一気に太い光線になり魔物達に向かっていった

「ぐわっ」

魔物達は全滅した。

「さあ行こうぜ」

ジークが言った。

「くっ」勇騎が膝をついた。

「どうした？」ジークがかけよった

「大丈夫だなんでもない」

勇騎は立ち上がった。

「そっか」

その時…

「ぐっはっはっは」貴様ら生きて帰れると思ったか…」

前方から大声がした。

前に大きな魔物がいた

右手に剣を持ち、左手に盾を持っていた。目は黒で口からキバがでてがっちりとした体格で色は紫の魔物だった。

「わが名はバーゴ、ジユラ様に仕える將軍の1人だ貴様らを叩き潰しにきた」

「こいつ先回りしやがったな気をつける勇騎こいつかなり強い…」とジークが言い切る前に勇騎はバーゴに殴りかかっていった。「おい。俺の話を聞け」

ジークは言った。

「へっ！たおしいんだろ！炎の拳！」勇騎は手に炎をまといバーゴを殴った。「ふんそんなのきかな」

バーゴは全く動かず直撃しても全く効かない様子だ。

「何！！」

勇騎は言った。

バーゴのでかい大剣が勇騎に襲いかかった。

「ぐおお」

勇騎は受け止めたが。あまりの力に勇騎はそのままおしかえされてしまった。

「勇騎」

ジークは叫んだ。

「ウインド！」ジークは叫んだ。風が巻き起こりバーゴに向かっていった。

「ふんそんなそよ風きかな」

勇騎は立ち上がった。

「へっ！強ええじゃねえかやつとましな奴がでてきたな」

勇騎は構えた。

「来いよ」

バーゴは剣を振り上げ勇騎に振りかざした

しかし勇騎はジャンプして避けた。

「くそっ！身軽なやつめ」

バーゴはそう言ったあと上に剣を振り上げた。

また勇騎はよけた

「くそ！当たり前やがれ」バーゴが言った。

勇騎は

「図体がでかいだけで素早さがねえみたいだな」

勇騎は炎の拳を使った。バーゴにあたった

「ふん、貴様は攻撃力が無いようだな」

バーゴは剣を振りかざした。しかしまたかわされた

「くそっ体力使うけどこれで…」勇騎は構えた。

「バイタツク！」

ジークは呪文を唱えた。勇騎の体が光に包まれた。

「何だ？これ」

勇騎は言った。ジークは言った。

「一定時間だが攻撃力を倍以上にすることができいけ」

勇騎の両手が炎に包まれた

「必殺！炎のガトリング！」

勇騎は炎に包まれた両手で殴りまくった。

「ぐは…」

バーゴはもろにくらい倒れた。

「よっしゃ！ざまあ見る！」

二人のコンビは勝った。

「よっしゃ行こうぜ」

二人は走り出した

その時上から岩が崩れ落ちてきた

「くそっさっきの勇騎のガトリングで…」

「おい！俺のせいだよ！逃げろ」

二人は走った。だが海の水が入ってきた 「ぐはっ」

二人は海に吸い込まれ意識がなくなっていた…

「俺、溺れたのかな…」

勇騎は思った。だが勇騎を呼ぶ声がした。

「勇騎！」ジークの声だ

はっと目が覚めた
ベッドの上らしい。　なんだここは？

普通の民家のようなだ。地面や天井は木でできていて、隣にベッドがもう1つあった。

ジークは

「大丈夫か？」

勇騎は

「大丈夫だ。ここはどこなんだ？」

ジークは言った。

「俺たちが溺れて気を失っているのを見てこの人が助けてくれたんだ」

隣に1人の女の子がいた…

「初めましてレイです。」

レイという女の子が言った。

勇騎は

「助けてくれたのありがとう！」

と言って立ち上がった。

「だめよ。まだ安静にしてないと」

レイが笑顔で言った　その笑顔を見て、勇騎はおとなしくなった。
そう　この子こそ勇騎の人生を変える人物なのだ…

その夜

ジークと勇騎がベッドで寝ていた。

勇騎は

「かわいいよなああの娘…」

ジークは

「何、惚れちゃったか？」

言った。

「バ、バカヤロ、そんなじゃねえよ…」

勇騎は慌て否定した。するとしたの階から声がした。

「どうする？神様の儀式まであと2日だぞ。誰を生け贄に渡す？」
男の声だ。

「もうこの村に若い娘はレイしかないだろう」

「待ってくれ。うちの娘を生け贄に出せと言うのか。」

「どうやらレイの父らしい」

「1人ださないと村に災いが起こるんだぞ」

「わかったわ。私が行けば村の人が救われるのね？私が生け贄になるわ」

レイが言った。

「おい！なにをバカなことを言っているんだ」

レイの父が言った。

「ごめんなさいお父さん、犠牲が私1人でいいならなるわ」

「ちよつと待った」

勇騎が降りていった。

「なんで生け贄が必要なんだよ？」

1人の男が言った。「この村には神様がいてな南の方にある洞窟に住んでおられる。しかし、今から約5年前毎年二回若者の生け贄を出さなければ。この村に災いが起こるとおおせになったのだ。」

勇騎は

「そんなの神でもなんでもねえ生け贄を求めてくるなんてなあ神のやることじゃねえ。俺がぶつとばしてやる！」

「待て！神様はつよいんだそんなことをしたらどんなひどいめに合うか……」

勇騎は

「へっ！大丈夫だよ俺は不死身だ！神だかなんだか知らねえが。この娘にたえだすやつは誰だろうと潰す！」

ジークも

「面白そうだな行くか」

「本当に行くのか？」

レイの父が言った。「お願いします。娘を助けてください」レイは

「ありがとう二人とも私も戦うわ」

「えっ！」

父は言った。

「大丈夫だよ私も呪文は使えるわそれにこの人達と冒険してみたいの」

勇騎は

「よし！行こうぜ！そいつを倒しに！」

「おおー！」

三人は叫んだ。

「ここから南に進んで行くと洞窟があるそこに奴がいる気をつけてくれよ」

「おう！ぜってえ倒してやる！行くぜ！行くぜ！行くぜ！」

三人は村を跡にした：

第2話脱出そして出会い…（後書き）

次回はついに神様？ と決戦！

第3話 神？VS勇者達（前書き）

バオウ…テストとかで更新が遅れてしまいました。すみません。
勇騎…てめえさっさと俺のかっこいい戦いぶりを書きやがれ！
バオウ…うるせー
出てくるな

第3話 神？VS勇者達

「ここか」

三人は洞窟の前にたどり着いた。

「この奥にやつがいるのかぶっ飛ばしてやる！」

勇騎は言った。

三人は洞窟に入った。洞窟の中には回りの壁に火が灯っていた。道は一直線に進んでいた。

何分歩いたか大広間に出た。

すると、前方に龍のような怪物がいた。両手、両足の爪が鋭く光った。羽があり、色は緑の魔物だった。

「ふん、我が神じゃ、神のベンゲルじゃ！」

ベンゲルと名のる魔物が言った。

「ほう、生け贄を三人も出してきたか。」

すると勇騎は言った。

「へっ！生け贄になんのはてめえだ」

ベンゲルは

「ふっふっふこの神である私と戦うと言うのか？」

ジークは

「なぜ、生け贄が必要なんだ？」と聞いた。

ベンゲルは

「死ぬ前に教えてやろうか。若者のエネルギーは非常に良いものだ。その若者のエネルギーを吸収して強くなるのだ。全てはジユラさまのために！」

「なに！ジユラだと？そういうことか、てめえ將軍だな」

勇騎は言った。

「ふん、今頃気づいたかそろそろ死ね！」

ベンゲルは言った。

「来るぞ！レイ、勇騎気を付けろ！」

ジークは言った。

ベングエルは口から火を吐いた。

しかし、三人共避けた。

「行くぞ！」

「炎の拳！」

勇騎は放った。

「ウインド！」

ジークは風の呪文を放った。

「ハイドロン！」

レイが叫んだと同時に水がすごい勢いでベングエルに向かっていった。

「ふん！こしやくな！」

ベングエルは翼を羽ばたかせ、

「ウイルド！」

呪文を唱えた。

翼からものすごい風が吹いてきた。

「何！」勇騎は吹き飛ばされジークとレイの呪文も風に飛ばされてしまった。

「くつくつく！この呪文はズイー級のウインドの次に強いド級の呪文だ」

ベングエルが言った。

「何！ド級だと！」

ジークとレイが言った。

「なんだそれ？」

勇騎は言った。

「いいか、呪文はな力の級で別れているんだ下からズイー、ド、S、ゼロ級になっているんだ、つまり、俺とレイが使ったのは、ズイー級、やつが使ったのがド級だ。」

ジークは言った。

「へえー」勇騎は言った。

「おもしれー！全力で倒してやるぜ。」

ベングルは

「おもしろい。これならどうだ？」

ベングルは口から甘い息を吐いた。

「何！！」

ジークはくらった。そして、そのまま倒れた。

「ジーク！」

勇騎は叫んだ。

「大丈夫よ寝てるだけ！」

レイが言った。

「ふっふっふ、そのまま寝ているがいい」

ベングルが言った。

「てめえ〜！」

勇騎は両手に炎をまとい向かっていった。

「炎のガトリング！」

ベングルに向かって炎のパンチを何発も繰り出した。

しかし、ベングルは

「スクタツグ！」

呪文を唱えた。

「何、びくともしねえ」

勇騎は言った。

何発もくらわした。ベングルは全く効いていない。

「この呪文は防御力を上げる呪文だ」

ベングルは言った。

「ウイルド！」

ベングルは呪文を唱えた。

風が勇騎を襲った。

「うわ〜」勇騎は吹っ飛ばされ。壁に思いっきりぶつかった。

「勇騎！」

レイは言って駆け寄った。

「勇騎！こうなったら同時攻撃よ！」

レイは言った。

「合体攻撃？」

勇騎は言った。

「私がド級の呪文を放つから、その炎の呪文をあなたの炎を会わせるの。そうすれば、やつを倒せるかもしれない。」

レイは言った。

「よし！わかった」

勇騎は構えた。

「でも気を付けて、かなりのMPを使うから一回しか打てないのだからチャンスは一回だけよ！」

レイは言った。

「わかった。いくぜ！」

勇騎は両手に炎をまとった。

「何をごちゃごちゃ言っている？とどめだ！」

ベングルはそう言って、

「ウイルド！」

と唱え風が勇騎たちに向かって行った。「ブォルズガ！」

レイは呪文を唱えた。

すると中くらいの火の玉が出てきた。

「何！貴様もド級の呪文を打てるのか、いいだろう。勝負だ！」

ベングルは言うのと、呪文の威力をあげてきた。

「勇騎！」

レイは言った。

「よっしゃ！炎のガトリング！」

勇騎は火の玉に向かってパンチをたくさん打った。

すると、火の玉が勇騎の炎と合体し、両手の炎がさらに激しく燃え、敵の風をそのまま打ち砕き、ベングルに向かって行った。

「何！」

ベングルに幾度の炎の拳を当てた。

「うお〜！」

勇騎はベンゲルに拳を連続で当てて行つた。

そして、ベンゲルは吹っ飛ばされ、倒れたまま動かなくなった。

「よっしゃ〜」

二人は叫んだ。

「あ？どうした？」 ジークが起き上がって言った。

「よう！起きたか、はっはっは、俺達の力で倒しちまったぜ」

勇騎は言った。

「ちくしょ〜俺は最後まで寝てたのか。かっこわる」

ジークは言った。

三人は村に戻った。

「おお〜戻ったか奇跡だ〜」

村人たちは喜んだ。

「ありがとう。我が娘を助けてくれて、今夜は祭りだ〜」

レイの父が言った。そして夜、祭りが始まった。たいこがなり、村人たちは踊ったり、酒を飲んだりしていた。

勇騎は村人たちに

「それでな、最後俺とレイがとどめをさしたんだジークは最後まで寝てたんだぜ」

ジークは

「おい！それ言うなよ〜」

笑いがおこった。

レイが来て、

「勇騎、ジーク、本当にありがとう」

と言った。

勇騎は

「何言つてんだよ、お前の力がなかったら、倒せなかったぜ」
と言った。

「そつだよ。あれは強かったな、」ジークは言った。

「頼みがあるの私も旅に連れてって！」 レイが言った。

「え？」

勇騎とジークが言った。

「私、昔から旅に出たいと思ってたの、一人じゃ、不安だったから、行けなかったけど、でもあなた達となら行ける気がするの。お願い！」

「でも、俺達の戦いはきついで世界を救わなくちゃいけないんだ…」
ジークは言った。

「わかってるあなた達が危険な旅をしていることくらい…でも私も世界を救いたい」

レイは言った。

「いいんじゃないの？」

勇騎は言った。

「結構強いし、いざって時は俺が守ってやる！」

勇騎は言った。

「ありがとう！」

レイは勇騎に抱きついた。

「…」

勇騎は顔を赤くした。

次の日、レイは父に「お願い！この人達と旅に行かして！」
言った。

父は、言った。

「そうか、旅に出たいのか、前から言ってたもんな、それにこの人達となら大丈夫な気がする。わかったいいだろう」

「ありがとう！」

レイは言った。

「今だから本当の事を言っておく」

父は言った。

「本当の事？」

レイは言った。

「実は、お前の真の親ではないのだ」

父は言った。

「え？」

三人は叫んだ。

「お前が赤ちゃんの時の話だ、ある日畑を耕していたら急に目の前に羽の生えた一人の女が現れた。この娘を育ててくれませんか？といわれうちは女房が死に、子供もいなかったなので、いいと言って、受けとったんだ。その子がレイ、お前だったんだ」

レイは驚いた。

「そんなことがあったのか。」

勇騎が言った。

レイは

「でも、お父さんはお父さんに代わりはない。私のお父さんはあなただけよ」

言った。

父は

「ありがとう！レイお前のような子を持てて幸せだよ。無事に戻ってくるんだぞ！」

「わかってるわ。行ってきます！」

レイは言った。

「よし！行くか！でもどこへ行けばいいんだ？」

ジークは言った。

「ここから南に行くと港町があるそこへ行けばいいだろう」レイの父が言った。

「わかった。サンキュー！じゃ行こうぜ！」

勇騎は言った。

そして、三人は村をあとにした…

そして、ここは奴隷の城…

「ジユラ様！逃げ出した勇騎たちにベンゲル様がやられました。」

がいこつの剣士が言った。

黒いローブを着た魔物、ジユラが言った。

「ふっふっふ、これで、五人いる將軍のうち、二人を倒したか。さあ、早く私の本へ来い！父のようにきれいさっぱり消してやるわ。あっはっは！」

ジユラの不気味な笑い声が響きわたった…

「あーくしょん！」 勇騎がくしゃみをした。

「風か？」

ジークが聞いた。

「誰かが噂してんのかなこのかつこいい俺様の」
勇騎が言った。

「まさか」

ジークが言った。

「よし！行こう！」レイが言った。

「おう！」

二人は言った。

俺達の戦いはこれからクライマックスだぜ！

第3話 神？VS勇者達（後書き）

バオウ…すみません勇騎が勝手なことを…
勇騎…次回は俺とレイのラブストーリー！
バオウ…だから出てくんな

お知らせ

お知らせ

かなり更新してないのですが

今仮面ライダーの小説かいてて更新できないっばいです

今ごろになってすみませんでした

あとは稼ぎです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2342e/>

龍・激・王！

2010年10月10日03時35分発行